

2024 年度
東京大学大学院情報学環
教育部シラバス

特別講義Ⅳ

(教育部概論)

上條 俊介 准教授

S1S2 ターム 水曜 5 限 (2 単位) 時間割コード : 5A701004

授業の目標・概要

情報学環を構成する多様な研究者が、おおむね 2 回ずつそれぞれの専門領域について概説する。なお、下記には学際情報学府における各研究者の所属コースが記されているが、講義のなかでコース全体の概説をするわけではなく、あくまで各自の専門領域についての講義となる。

情報学環の研究活動を知る貴重な機会であり、1 年生はなるべく履修してほしい。

教科書

特になし。

参考書

特になし。

授業計画

第 1 週	4/10	大庭 幸治 (生物統計情報学コース)
第 2 週	4/17	大庭 幸治 (生物統計情報学コース)
第 3 週	4/24	藤田 結子 (文化・人間情報学コース)
第 4 週	5/1	藤田 結子 (文化・人間情報学コース)
第 5 週	5/8	蜂須賀 知理 (総合分析情報学コース)
第 6 週	5/22	蜂須賀 知理 (総合分析情報学コース)
第 7 週	5/29	大原 美保 (先端表現情報学コース)
第 8 週	6/5	大原 美保 (先端表現情報学コース)
第 9 週	6/12	三谷 武司 (社会情報学コース)
第 10 週	6/19	三谷 武司 (社会情報学コース)
第 11 週	6/26	予備日
第 12 週	7/3	予備日
第 13 週	7/10	予備日

メディア・ジャーナリズム論講義VI

(体験的・実践的ジャーナリズム入門)

福永 宏 講師 (元・読売新聞社／元・東洋経済新報社／同窓会副会長)

A1 ターム 金曜 5・6 限 (2 単位) 時間割コード : 5A101006

授業の目標・概要

東京大学新聞研究所・社会情報研究所・情報学環教育部同窓会が主宰する教育部 OB による講義である。現在、新聞、放送、雑誌などのいわゆる「既成メディア」は、知識人、種々の政治勢力、統治権力、一般大衆などさまざまな方面から批判を受けている。これはわが国のみならず、米国でもみられるように世界的な現象といえる。さらに、経済的にもネットメディアに追い上げられて部数、視聴率、広告収入などの経済的な面でかつてない厳しい状況に直面しており、こうした傾向は今後、さらに強まると考えられる。そこで本講義では、ネットメディアを含むジャーナリズムやメディアの現場で活動している本教育部出身者が自らの直接的な体験を踏まえ、現在の言論界の状況やジャーナリズムが置かれている実情を紹介・解説し、受講者と討論する。将来、メディアやジャーナリズム分野へ進もうと考えている者はもちろん、他分野への就職を考えている研究生にとっても、「現在」を理解するために有益な体験となるであろう。

教科書

なし

参考書

なし

授業計画

授業日程は以下の通りである。

10/4 (金) 17:00～ 福永 宏 読売新聞社・東洋経済新報社 OB

10/11 (金) 17:00～ 高木 徹 NHK チーフプロデューサー (報道系)

10/18 (金) 17:00～ 萩原 豊 TBS 報道局解説・専門記者室長

10/25 (金) 17:00～ 水谷典雄 博報堂 OB、作家

11/1 (金) 17:00～ 土生修一 読売新聞社 OB、日本記者クラブ前専務理事

11/8 (金) 17:00～ 糸永正行 日刊工業新聞社局次長・M&A Online 編集委員

11/15 (金) 17:00～ 講師全員参加による自由なディスカッション

メディア・ジャーナリズム論講義Ⅶ

藤澤 美由紀 講師（毎日新聞社）

A1A2 ターム 月曜 6 限（2 単位） 時間割コード： 5A101007

授業の目標・概要

講師は毎日新聞社で働く現役の記者です。特に LGBTQ など性的少数者の取材に力を入れるとともに、その中で直面してきた報道機関の課題についても考え、取り組んできました。

この授業では、さまざまなマイノリティーに関する取材と報道を実践してきた記者たち、また取材を受けてきた立場の当事者の方もゲストに招き、現場の話を手がかりに報道の果たすべき役割や課題について考えます。終盤では実際に取材し、記事を書く機会も設けます。

教科書

特になし

参考書

『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム ケアの倫理とともに』林香里、2011 年、岩波書店
ほか授業時に随時紹介

授業計画

第 1 週 ガイダンス(受講生の要望をお尋ねします)

第 2～9 週 ゲストによる講義など

第 10～12 週 取材の実践、講評

第 13 週 まとめ

詳細は第 1 回目にお伝えします。

メディア・ジャーナリズム論講義Ⅷ

(ドキュメンタリーを見て、語ろう (Ⅱ))

東野 真 講師 (NHK)

A1A2 ターム 火曜 6 限 (2 単位) 時間割コード : 5A101008

授業の目標・概要

NHK でドキュメンタリー番組を制作し、現在「ETV 特集」のプロデューサーを務めている講師が、自分の体験をもとにドキュメンタリーの魅力、可能性そして課題などについて皆さんと議論しながら考えていきます。ドキュメンタリーの魅力に触れてもらい、リテラシーを高めてもらうというのが一番の目標です。受講生の皆さんには毎回異なるドキュメンタリー番組を視聴してもらう予定です。理論的・体系的なものではなく、経験にもとづく実践的な内容になる予定です。
昨年度につづく 2 期目ですが、視聴作品が重複しないようなるべく配慮します。

教科書

なし

参考書

なし

授業計画

- 第 1 週 テレビの中のドキュメンタリー (概論)
- 第 2 週 受講生自己紹介など
- 第 3 週 ヒューマンドキュメンタリーの魅力Ⅰ
- 第 4 週 ヒューマンドキュメンタリーの魅力Ⅱ
- 第 5 週 社会の真実に取材で迫るⅠ
- 第 6 週 社会の真実に取材で迫るⅡ
- 第 7 週 戦争が終わらない世界でⅠ
- 第 8 週 戦争が終わらない世界でⅡ
- 第 9 週 埋もれた歴史を発掘するⅠ
- 第 10 週 埋もれた歴史を発掘するⅡ
- 第 11 週 海外のドキュメンタリーを見る
- 第 12 週 ドキュメンタリーの新しい潮流
- 第 13 週 まとめ

メディア・ジャーナリズム論研究指導 I

(災害情報・調査法：東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・研究)

関谷 直也 教授

通年 集中講義 (2 単位) 時間割コード：5A103001

授業の目標・概要

東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故から 13 年が過ぎました。この震災、原子力事故の被害、復興の課題、困難をどのように伝えていくか、これは非常に大きな課題です。

ジャーナリズムを学ぶみなさんにとっても、この課題は今後数十年続いていくことになりますし、現在の課題を理解しておくことは、また①福島原発事故や東日本大震災の教訓をどう伝え、今も残る課題にどう対処すべきか、②今後の災害や危機を考える上で基礎として、③さかのぼって広島・長崎の原爆、沖縄問題などをどう考えていくべきかを考える契機にもなる非常に重要なタイミングだと考えています。

この演習では、夏休みの 3 日間に福島県大熊町・双葉町を訪れ、調査を行いたいと思います。

前提知識は必要としませんが、研究指導ですので本テーマに関心・興味があることを前提とします。

教科書

授業中に指示

参考書

授業中に指示

授業計画

下記、(1) ガイダンス、(2) 現地フィールドワーク全日程に参加することを条件とする。

(1) ガイダンス

8月17日 大学 (ハイブリッドでの参加可)

(2) 現地フィールドワーク及び講義

9月16日～18日

メディア・ジャーナリズム論実験実習Ⅱ

(ドキュメンタリー制作入門)

日笠 昭彦 講師

(元日本テレビ「NNNドキュメント」プロデューサー・LLC創造ノ森 代表)

A1A2 ターム 木曜 6 限 (2 単位) 時間割コード : 5A104002

授業の目標・概要

この講義は、福武ラーニングスタジオ 3 (福武ホール B2 階) にて「対面」で実施。

3~5 人でチームを編成してリサーチ～撮影～編集を繰り返しながら、20 分程度のドキュメンタリー作品を制作。映像ジャーナリズムを体感します。

現役の番組制作者である講師が制作上のノウハウを伝えますが、取材交渉や撮影・編集はチームごとに大学構外で授業外の時間を使って行います。

その時間を確保できない人は受講しないでください。

注) 履修するためには 10 月 10 日 (木) 18:45 (授業開始時刻) までに履修登録を行うこと

* 実習授業のため撮影機材のトレーニングワークショップやグループ分けを行い、その後実習に入るため

教科書

特になし

* 講師が制作に携わった TV 番組やニュース企画、過去の学生の作品 等

参考書

「映像メディアのプロになる！」奥村健太・藤本貴之著／藤原道夫監修 (河出書房新社)

「書く力～私たちはこうして文章を磨いた～」池上彰・竹内政明 著 (朝日新聞出版)

授業計画

10/3 ガイダンス「実習授業の概要と進め方」「ドキュメンタリーとは何か？」

10/10 講義「ドキュメンタリーの作法①企画・リサーチ編」

10/17 メディアスタジオ (情報学環本館 7 階) にて撮影機材のトレーニングワークショップ

10/24 受講者による企画案の発表～投票による企画の選考

10/31 班ごとに構成要素の洗い出しと役割の決定、講義「ドキュメンタリーの作法②構成・撮影編」

11/7 班ごとに構成会議～番組全体の構想を発表 * リサーチ・取材対象者への出演交渉開始

11/14 班ごとに構成会議～講義 * 撮影開始

11/21 班ごとに構成会議～講義「ドキュメンタリーの作法③編集・仕上げ編」

11/28 ★休講⇒この間にリサーチ・撮影・粗編集を進める

12/5 講師による中間試写～追加取材～再構成

12/12 講師による中間試写～追加取材～再構成

12/19 講師による中間試写～追加取材～再構成

12/26 ★休講⇒この間に仕上げ作業を進める

1/9 講師による最終試写～完成に向けて精査

1/16 講師による最終試写～完成に向けて精査

1/23 全員による完成試写 ☆作品の上映と講評～制作実習のふりかえり

情報産業論講義Ⅱ

(人生 100 年時代の「ウェルビーイング・マーケティング」)

大高 香世 講師 (博報堂)

A1A2 ターム 水曜 5 限 (2 単位) 時間割コード : 5A201002

授業の目標・概要

他人事ではない、人生 100 年時代。なんと、2007 年に日本で生まれた子どもの 2 人に 1 人は 107 歳より長く生きると推計されています。生き方の大きな変革が求められる中、社会のあり様と同時にマーケティング・コミュニケーションのあり方も変わりつつあり...その 1 つの解が「ウェルビーイング・マーケティング」という新しいフレームワークです。

ウェルビーイング (Well-being) とは人が身体的・精神的・社会的に“よい状態”が続くことを指す概念ですが、ビジネスの現場でも取り入れられるようになってきました。

「モノを売るためのマーケティングから、人をしあわせにするマーケティングへ」

～この講義ではこれからの時代のマーケティング・コミュニケーションと生活者発想を学ぶとともに、あなた自身のしあわせな生き方についても発見していけるような体験をご提供します。また、新時代に欠かせないビジネススキルも伝授します。

授業は全てワークショップ形式。一方通行ではない参加型の講義と演習で、楽しみながら共に成長を実感しましょう！

(株)博報堂にてマーケター歴 30 年、ファシリテーター歴 20 年、会社経営 10 年、研究所所長歴 1 年、という異色の経歴をもつ講師がみなさまをナビゲートします。

教科書

参考書

授業計画

#1 : 日本の社会課題と人生 100 年時代のキャリアデザインを探索しよう

#2 : マーケティング・コミュニケーションの変遷と現在地を確認しよう

#3 : 新潮流「ウェルビーイング・マーケティング」を学ぼう

#4 : ウェルビーイング・マーケティングの実践者に聴こう

#5 : わたしのウェルビーイングってなんだろう？

#6 : みんなで未来社会のウェルビーイングマップを創ろう

#7 : 新しいマーコムに必須な思考法を身につけよう
～ロジカルシンキング×ラテラルシンキング=WOW

#8 : 新しいマーコムに必須な発想法を身につけよう
～イノベーション創発手法

#9 : 新しいマーコムに必須な拡散法を身につけよう
～PR（パブリック・リレーションズ）発想による合意形成

#10 : 人生 100 年時代に必須な能力を身につけよう
～ファシリテーション型リーダーシップ

#11 : ウェルビーイング・マーケティングのアイディアを創発しよう

#12 : 未来社会のウェルビーイングマップを発表しよう

#13 : 拝啓、わたしとみんながしあわせになる世の中へ

※ゲストなどの都合により日程や内容を変更する場合があります

情報産業論実験実習Ⅷ

（「出版のはなし——編集者の知見を窓口にして」）

藤平 歩 講師（中央公論新社）

S1S2 ターム 木曜 6 限（2 単位） 時間割コード：5A204008

授業の目標・概要

出版に関する実務を中心に論じながら、情報産業における出版メディアの特性を考察する。／1996 年をピークに、出版の市場規模は右肩下がり、縮小傾向が続いています。出版に関するかぎり「失われた 30 年」は終わることがないと予想されます。この 30 年間を、編集の実務に携わってきた者として、その経験・知見をもとに、出版界の「いま」をお伝えします。中心となるのは、紙の本ですが、コンテンツビジネスとしてのあり方、また、クリエイター（作家・筆者）と読者（ユーザー）をつなぐ媒介としての役割などにも言及してゆきます。さらに、出版という枠にとどまらない、思考の技術、方法論としての「編集（術）」について、手がかりを得られる機会とします。出版の困難と可能性を、ともに考え、ともに学ぶ場としたいと思います。

教科書

なし

参考書

必要な都度、紹介します。

授業計画

- 第 1 週 ガイダンス（読書のいま、出版のいま）
- 第 2 週 本ができるまで（企画書からはじまる）
- 第 3 週 本が届くまで（流通・書店）
- 第 4 週 出版社とは（大手出版社、ひとり出版社。ゲストスピーカーを予定。ゲストの都合により、日程は入れ替わる可能性があります）
- 第 5 週 編集者とは（無から有を生み出す）
- 第 6 週 雑誌とは（ゲストスピーカーを予定。ゲストの都合により、日程は入れ替わる可能性があります）
- 第 7 週 装丁とは（造本・イラスト・写真）
- 第 8 週 著作権のはなし
- 第 9 週 書店のいま（書店見学も実施。ゲストスピーカーを予定。ゲストの都合により、日程は入れ替わる可能性があります）
- 第 10 週 読者に向けて（広告・書評・SNS）
- 第 11 週 本を書く人（ノンフィクション、小説。ゲストスピーカーを予定。ゲストの都合により、日程は入れ替わる可能性があります）
- 第 12 週 企画書をつくる
- 第 13 週 模擬編集会議（受講者が、企画書をもとにプレゼンテーションを行います）

情報産業論実験実習IX

(学際情報経営工学)

上條 俊介 准教授

A1A2 ターム 火曜 5 限 (2 単位) 時間割コード : 5A204009

授業の目標・概要

情報学の特徴を生かした経営工学の講義および演習の機会を提供する。それぞれの課題を、起業家、ベンチャーキャピタル、マーケティングの各分野において、第一線で活躍するゲストスピーカーを招き、情報産業に関する経営工学を学ぶ。

教科書

特になし。

参考書

特になし。

授業計画

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 グループ形成
- 第 3 回 課題 1 講義
- 第 4 回 課題 1 グループワーク
- 第 5 回 課題 1 プレゼンテーション
- 第 6 回 課題 2 講義
- 第 7 回 課題 2 グループワーク
- 第 8 回 課題 2 プレゼンテーション)
- 第 9 回 課題 3 講義
- 第 10 回 課題 3 グループワーク
- 第 11 回 講師 3 プレゼンテーション
- 第 12 回 まとめ

情報社会論講義 I

(災害情報論・基礎論)

関谷 直也 教授

S1S2 ターム 月曜 5 限 (2 単位) 時間割コード : 5A301001

授業の目標・概要

本講義は、情報学環にある総合防災情報研究センターの教員がオムニバスで講義を行う。

災害情報の研究は、1970 年代に東海地震説が提起された際に、地震研究所から情報学環の前身（社会情報研究所）の前身である新聞研究所に対して共同研究の依頼があったことに端を発する研究であり、本学環オリジナルの研究分野である。災害情報として東海地震が仮に予知可能になった場合に災害情報を人々にいかに伝えて、人の命を救うかが当初の課題であった。その後、「災害と情報」研究班が組織され、流言やパニックの研究、気象災害の情報、安否情報の研究など多面的に展開され、1999 年には日本災害情報学会が設立され、2008 年には総合防災情報研究センターが設置された。

総合防災情報研究センター教員は、地震研究所、生産技術研究所、情報学環を基に設置され、地震学、防災工学、社会情報学など様々な分野の教員からなる。なお全員が、「情報」「メディア」「コミュニケーション」などを直接の研究分野としている訳ではないが、これも情報学環の一つの研究分野であると理解され、受講を検討されたい。

本講義はオムニバス講義として、総合防災情報研究センター所属の教員が 1 コマの中で各自の研究分野に関連する学部 2 ～ 3 年生向けの講義として実施される。

教科書

特になし

(各担当教員が指示する)

参考書

特になし

(各担当教員が指示する)

授業計画

第 1 回	4 月 15 日	関谷 直也	ガイダンス・災害心理学
第 2 回	4 月 22 日	目黒 公郎	防災概論
第 3 回	5 月 13 日	沼田 宗純	防災プロセス工学
第 4 回	5 月 20 日	開沼 博	ふくしま論 (仮)
第 5 回	5 月 27 日	酒井 慎一	観測データに基づく都市防災
第 6 回	6 月 3 日	飯高 隆	地震と防災
第 7 回	6 月 10 日	大原 美保	災害レジリエンス
第 8 回	6 月 17 日	石橋 真帆	リスク・コミュニケーション
第 9 回	6 月 24 日	地引 泰人	国際防災ガバナンス
第 10 回	7 月 1 日	松尾 一郎	タイムライン防災 (仮)
第 11 回	7 月 8 日	松尾 一郎	タイムライン防災 (仮)

第 12 回 7 月 22 日 有働由美子 テレビ報道での災害時の呼びかけ

7 月 29 日（予備日）

情報社会論講義Ⅱ

（プラットフォーム論～「ビッグテック」が「ビッグ AI」に変容しつつあるいま、市民、国家、ジャーナリズムは彼らとどう向き合うべきなのか？）

西村 陽一 講師

（情報学環客員教授/元朝日新聞社常務取締役/ 元ザ・ハフィントン・ポスト・ジャパン代表取締役）

S1S2 ターム 木曜 5 限（2 単位） 時間割コード：5A301002

授業の目標・概要

記者として日本、米国、ロシア、中国で勤務した後、朝日新聞社の編集トップと日米合弁ネットメディア「ザ・ハフィントン・ポスト・ジャパン」の代表取締役を務めた実体験を踏まえ、GAFAM（グーグル、アップル、フェイスブック＝メタ、アマゾン、マイクロソフト）に代表される巨大デジタル・プラットフォームや中国のビッグテックについて、様々な角度から考えます。

史上最速の成長を遂げた彼らは、皆さんの日常生活と人間関係に不可欠の存在となりました。時に政府をも凌駕する強大なパワーを持ち、表現の自由、世界の地政学、トランプ返り咲きを取りざたされる米大統領選、ロシア・ウクライナ戦争や中東紛争も、その存在抜きには語れない時代となりました。彼らのビジネスモデルは成熟する一方で、人工知能（AI）や AR・VRなどをめぐる競争も激しくなり、「ビッグテック」はいまや「ビッグ AI」へと変貌しつつあります。巨大プラットフォーム・AIの時代を迎え、テクノロジーと民主主義をめぐる論議も歴史の転機に入ったと言えるでしょう。

講義の目的は、「市民・読者・ユーザー」「ジャーナリズム」「国家」の三つの層に分け、それぞれと巨大プラットフォームとの関係を考察するとともに、「生活」「政治と選挙」「戦争」「地政学リスク」「イノベーション」といった次元に応じて彼らが果たしている役割と問題点を分析することで、その本質とは何か、いったん立ち止まって見直そうというものです。世界各地で記者として取材してきたこと、経営の立場から携わったシリコンバレー集団や日本のプラットフォームとの交渉体験なども紹介し、米大統領選やウクライナ戦争と偽情報・誤情報、日米欧の法廷と議会で繰り広げられるデータと AI の規制論争、米中対立の焦点になった TikTok 旋風、風雲児イーロン・マスクの言動、ヤフーとラインの合併といった現在進行形の事例も適宜織り交ぜて解説していきます。

教科書

とくにありません。

参考書

『GAFA next stage ガーファ ネクストステージ—四騎士+Xの次なる支配戦略』
スコット・ギャロウェイ 東洋経済新報社

『監視資本主義—人類の未来を賭けた闘い』 ショシャナ・ズボフ 東洋経済新報社

『マインドハッキング—あなたの感情を支配し行動を操るソーシャルメディア—』 クリストファー・ワイリー 新潮社

『プラットフォーム・レボリューション』 ジェフリー・パーカーほか ダイヤモンド社

『ネットワーク・エフェクト』 アンドリュー・チェン 日経 BP

『なぜ、TikTok は世界一になれたのか？』 マシュー・ブレナン かんき出版

『デマの影響力』 シナン・アラル ダイアモンド社
『A I 2 0 4 1』 カイファー・リーほか 文藝春秋
『システム・エラー社会』 ロブ・ライヒほか NHK 出版

雑誌 Foreign Affairs の関連論文

NYT、ECONOMIST などの関連記事

これらのエッセンスは講義の中でその都度紹介します

授業計画

第 1 週 ガイダンス～世界のメディアの過去・現在・未来

第 2 週 プラットフォームビジネスのモデル～パワーと成長の源泉、ネットワーク効果

第 3 週 戦争とプラットフォーム～ロシア・ウクライナ戦争、中東危機、戦争報道

第 4 週 地政学リスクとプラットフォーム～テクノポラー世界と勢力図、デジタル立憲主義、

A I ガバナンス

第 5 週 フェイスブック研究～成長の軌跡、フェイスブック文書の衝撃、アルゴリズム

第 6 週 プラットフォーマー論争～トランプ、マスクと表現の自由、ケンブリッジ・アナリティカ

事件

第 7 週 現代の石油ビッグデータの規制～日米欧中の構図、規制論の歴史・背景・思想

第 8 週 欧州とプラットフォーム～GDPR、DSA、DMA、A I 規制

第 9 週 米国とプラットフォーム～競争政策の系譜、通信品位法 2 3 0 条、イノベーションと A

I

第 10 週 日本とプラットフォーム～公取委の議論、SNS 規制、官民共同規制論

第 11 週 ジャーナリズムとプラットフォーム～ニュースの対価と A I 著作権をめぐる攻防の行

方

第 12 週 中国とプラットフォーム～デジタル権威主義、T i k T o k 急成長の背景

第 13 週 民主主義とプラットフォーム～個人情報、データ主権、公共性

第 14 週 日本にプラットフォームは生まれるのか

第 15 週 ディスカッションとまとめ

テーマに関連した大きな出来事が起きた場合は、構成を変更する可能性があります。皆さんの希望があれば、番外編として途中 1 ～ 2 回、自由参加の「オフィスアワー」で自由に議論する場を設けます。

情報社会論講義Ⅲ

(視覚・聴覚・味覚の五感で「編集力」を磨く
～未来のメディアを見据えた、地域からの実践～)

森 禎行 講師 (LINE ヤフー)

S1S2 ターム 月曜 5 限 (2 単位) 時間割コード : 5A301003

授業の目標・概要

◆未来のメディアは、視覚や味覚など「五感」を利用したコミュニケーションが予想されます。この講義では、視覚・聴覚・味覚の感覚を通して、また福島など地域課題からの実践アウトプットにも重点を置き、今後の情報社会を探究します。

◆講師は、毎日新聞記者と Yahoo!ニュース編集という新聞とネットメディアの2つのメディアを経験。E コマースや食のブランディング事業を経て、今は関係人口創出にも従事しています。これら知見を踏まえ、「誰もが編集者」となった現代の先にある「五感で伝えるメディア」をみすえ、それぞれの「編集力」を磨きます。

◆現代は、視覚での認知が圧倒に多く、視覚過多ともいえる状況です。感覚には、聴覚や味覚、触覚もあります。こうした複数の感覚のメディアにおける役割を、多くのゲスト講師による講義や実践を通して学びます。

◆実践の現場は、地域とインターネットです。「学生が最も行くべき地域」福島を、フィールドワーク拠点とします。「震災の被災地」から「最先端の町」へ変ぼうしつつある、課題先進地域・福島を体験したうえで、実践アウトプットにつなげます。

◆編集力は、知識習得や現地体験から、演習と振り返りの「学習サイクル」で身に付けます。授業出席は、本郷での対面を基本とします。また、福島へ現地訪問する機会が設定され、学ぶにとどまらず、メディアを実践(編集)する楽しさを実感できます。積極的な学生をお待ちしています。

◆内容は昨年と大幅に入れ変えたため、昨年の「情報社会論講義」履修者の再履修も歓迎します。

教科書

特になし(授業中に随時紹介)

参考書

特になし

授業計画

第1週: オリエンテーション(講義の方針/フィールドワークの説明など)

<メディアを編集する 視覚編>

第2週: ネットメディア(Yahoo!ニュースを中心に)を知る

第3週：読まれる「見出し」の付け方を実践する

第4週：振り返りと概念化

＜メディアを編集する 聴覚編＞

第5週：災害報道を知る

第6週：災害時、避難につながる「声かけ」を学ぶ、実践する

第7週：振り返りと概念化

第8週：未定 ※味覚編の予定

＜メディアを編集する 聴覚・伝承編＞

第9週：ラジオなど音声を通した伝承を探る ～福島を題材に～

第10週：音声を通した伝承を実践し、振り返る

＜メディアを編集する 味覚編＞

第11週：「食はメディア」を知る「おいしい」を科学する

第12週：振り返りと概念化

第13週：まとめ

情報社会論文献講読 I

(メディア論と文化研究)

安 ウンビョル 助教

S1S2 ターム 火曜 4 限 (2 単位) 時間割コード : 5A302001

授業の目標・概要

私たちの日常感覚、コミュニケーションや人間関係は、「自然に」与えられるものではなく、常に具体的なモノや技術に「媒介」されて起こるものである。本講義では、このような「媒介」するもの、「間」にあるものとしてのメディアに焦点を当てる。メッセージの内容ではなくそれを届ける「乗り物＝メディア」そのものの性質に注目を喚起したマクルーハンのメディア論、マクルーハンの主張を「技術決定論」と批判したレイモンド・ウィリアムズのテレビ研究、単に手段ではなく、私たちの時間・空間・身体感覚の形成する「移動のメディア」に関する文献を取り上げる。これらの文献を通してメディア・テクノロジーと社会・文化の関係をめぐる重要な論点を理解するとともに、それに基づいて日常世界を観察することで、まるで必然的で自明に思える現在の技術的状况に対する批判能力を養うことを目標とする。受講生は、指定の文献および関連する論文等を読むとともに、担当部分のレジュメ作成・報告を行い、また授業内でのディスカッションに参加することが求められる。また最終課題として、日常の身近なメディアの働きかけと自分との関係を考察した作業物の提出と発表が求められる。詳しくは、第 1 週目の授業（イントロダクション）で説明を行う。

教科書

マーシャル・マクルーハン (栗原裕・河本仲聖訳) 『メディア論：人間の拡張の諸相』(みすず書房, 1987)
レイモンド・ウィリアムズ (木村茂雄・山田雄三訳) 『テレビジョン：テクノロジーと文化の形成』(ミネルヴァ書房, 2020)

参考書

授業中、適宜提示する。

授業計画

- 第 1 回 イントロダクション
- 第 2 回 メディア論／文化研究とは何か (講義・文献紹介)
- 第 3 回 M. マクルーハン『メディア論：人間の拡張の諸相』序章～第 2 章
- 第 4 回 M. マクルーハン『メディア論：人間の拡張の諸相』第 3 章～第 7 章
- 第 5 回 M. マクルーハン『メディア論：人間の拡張と諸相』第 2 部 (部分)
- 第 6 回 R. ウィリアムズ『テレビジョン』第 1 章・第 2 章
- 第 7 回 R. ウィリアムズ『テレビジョン』第 3 章・第 4 章
- 第 8 回 R. ウィリアムズ『テレビジョン』第 5 章・第 6 章
- 第 9 回 『電話するアメリカ』『鉄道旅行の歴史』River of Shadows 重ね読み
- 第 10 回 『風景の生産・風景の解放』
- 第 11 回 『移動と自動車の社会学』
- 第 12 回 「都市はメディアである」

第 13 回 課題発表・最終ディスカッション

情報技術論講義 I

酒井 慎一 教授

A1A2 ターム 水曜 6 限 (2 単位) 時間割コード : 5A401001

授業の目標・概要

現代における最新の情報技術について、その基礎的な概念や最新の技術トピックをテーマとして、情報技術が産業や政策、社会、個人の生活に与えるインパクトを理解することを目指す。そして、それらの情報技術がもたらす社会的な問題や課題に対して意識を向け、その解決のために必要となる考え方を身に付ける。

そこで、実際に情報技術にかかわる企業で活躍されている方々をお招きして、最新の情報技術に関する講義を行う。さらに、その講義を元にして社会課題や将来展望等を見据えた議論を行う。

教科書

特になし

参考書

授業の前後で紹介することがあります

授業計画

授業計画 (仮)

- 第 1 回 概要
- 第 2 回 機械学習
- 第 3 回 防災情報技術
- 第 4 回 ERP システム
- 第 5 回 生成 AI 技術
- 第 6 回 半導体
- 第 7 回 ハードウェア技術
- 第 8 回 まとめ 1
- 第 9 回 ブロックチェーン
- 第 10 回 ファイアウォール
- 第 11 回 デジタルウォレット
- 第 12 回 インターネット
- 第 13 回 まとめ 2

ゲスト講師の都合により講義の順番や内容が入れ替わる可能性があります。

情報技術論講義Ⅸ

(ヒューマンコンピュータインタラクション概論)

濱田 健夫 特任准教授 ハウタサーリ アリ 特任准教授

S1S2 ターム 火曜 5 限 (2 単位) 時間割コード : 5A401009

授業の目標・概要

我々はテクノロジーに囲まれ日々の生活を便利に過ごすことができているが、テクノロジーを利用するためにはユーザとの間を取り持つインタフェースが不可欠である。ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI) はインタフェースを介してどのようにコンピュータと関わり利用するかについて焦点を当てた学際的学問分野である。この分野の研究成果を知ることによってテクノロジーのデザイン手法を学ぶことができる。本講義では HCI に関する幅広い研究トピックスを交えてデザイン原理や方法論について紹介するとともに、バーチャルリアリティ (VR) 技術を使ったグループワークを通して、インタラクションデザインの実習を行う。

教科書

必要があれば適宜指示する。

参考書

『The Design of Everyday Things』, Don Norman

『オーグメンテッド・ヒューマン』, 暦本 純一

『VR は脳をどう変えるか? 仮想現実の心理学』, Jeremy Bailenson

授業計画

- 第 1 週 (4/9) オープニング, History of HCI
- 第 2 週 (4/16) User Interface / Experience / Interaction Design (UI / UX)
- 第 3 週 (4/23) Computer-Mediated Communication (CMC) and Affective Computing
- 第 4 週 (4/30) Extended Reality (XR): Augmented / Virtual / Mixed Reality (AR / VR / MR)
- 第 5 週 (5/14) Computer-Supported Cooperative Work (CSCW) and Social Media
- 第 6 週 (5/21) Human Augmentation / Cyborg / Wearable Computing
- 第 7 週 (5/28) Artificial Intelligence (AI) and Internet of Things (IoT) in HCI
- 第 8 週 (6/4) HCI Methodology (ゲストスピーカー)
- 第 9 週 (6/11) アイデア出し, チームビルディング
- 第 10 週 (6/18) Interaction Design in XR (1)
- 第 11 週 (6/25) Interaction Design in XR (2)
- 第 12 週 (7/2) Designing with VR
- 第 13 週 (7/9) Designing in VR
- 第 14 週 (7/16) Designing for VR
- 第 15 週 (7/23) 最終発表会

情報技術論実験実習Ⅱ

苗村 健 教授

通年 水曜 4 限 (2 単位) 時間割コード : 5A404002

授業の目標・概要

メディアやコンテンツの研究に取り組む学生を対象として通年で開講する。一般向けの展示会を開催するために、さまざまな表現手法を学び作品を制作する。また、受講者は企画や運営上の役割を担い、ディスカッションを通して展示全般のプロセスを実践する。最終的には活動の概要をまとめたアーカイブ冊子を刊行する。

教科書

なし

参考書

なし

授業計画

企画運営のために、受講生はプロデューサー・マネージャー・ブランディング・会計・デザイン・会場・広報・アーカイブ・コピーなどの役割分担をする。原則として全員が作品制作に携わり、一般向けの展示会において臨場し、来場者からの生の声を聴くことを重視する。